

臨 床

感染創療法ノ今昔 (文献抄集) 其二

(第二十三回近畿外科集談會特別講演要旨)

助教授 醫學博士 横 田 浩 吉

第一章 古來本邦ニテ行ハレタル創傷療法 (承前)

徳川中世ニハ古醫方ノ吉益東洞萬病一毒説ヲ立テ、天下ニ叫ビ、後世家ハ之ニ反對シテ讓ラズ、更ニ兩者ヲ折衷セル考證派和方家ナドモ出ヅルニ至ツタ。外科ノ方面デ最モ注目スベキハ阿蘭陀學派ガ隆盛トナツタコトデアル。(之ニハ明和八年、千住ノ骨ヶ原デ行ハレタ本邦最初ノ屍體剖檢「腑分ヶ」ガ最モ興ツテ力ガアツタ。即チ其所見ハターヘル、アナトミアニ示セルモノト全ク一致シテ居リ、西洋醫學ガ如何ニ進歩シタモノデアルカガ如實ニ證明セラレタノデアル。杉田玄伯之ヲ觀テ憤起シ、同志ト謀ツテ前野良澤ヲ盟主トシ解體新書ノ上梓ヲ企テ安永三年之ヲ完成シタ)。

蘭學ヲ代表セル外科ニハ *Petit* 派ノ西流桂川流ニ加フルニ *Plant* 派ノ吉雄流ガアツタ。杉田玄伯、大槻玄澤ガ譯シタ瘍醫新書 (*Heister*) モ出タ。然シ後述ノ華岡青洲ノ如キ臨床上ノ大家ハ無カツタラシイ。

徳川季世ニハ杉田玄卿ガ天保元年瘍科新選 (*Yenk*) ヲ出シ外科ノ全書トシテ初メテ價值アル物が出來タ。當時最モ優レタル大外科醫ハ紀州ノ華岡青洲デアツタ。彼ハ漢蘭折衷ノ大外科ヲ立テ、鬼唇、鎖口、鎖肛、鎖陰、石淋、乳癌、骨瘤腐骨疽、脫疽、腸疝、便毒、痔漏、流注、ナドニ手術ヲシタ。其病名モ多クハ彼ガツケタラシイ、又彼ハ麻酔藥ヲ用ヒタ即チ「曼陀羅華八、草烏頭二、白芷二、當歸二、川芎二ヲ細挫、熱湯ニ投シ攪拌シ滓ヲ去リ溫服スレバ一二時ニシテ其効(瞑眩) ヲアラハス、此間ニ乗ジテ施術シ、了レバ煎茶ニ鹽ヲ加ヘテ服セシメ醒後人參調榮湯ヲ授ク、」(昔二千年前華陀

ガ一種ノ麻醉藥ヲ製シタル由)。金創ニハ縫合ノ法、繃帶ノ法ヲ教ヘ先ヅ火酒ニ浸セル綿布ヲ以テ創及ビ其周邊ヲ洗拭シ創ハ必要ニ應ジテ縫合スル、其糸ノ結び方モ殆ド今日ノ通りデアル、最後ニ再ビ火酒ニテ拭ビ創ノ最下位ニ綿撒糸ヲ挾ミテ瘀液ノ排泄ニ便シ周圍ニハ椰子油ヲ塗り創口ニハ「ハルサム」又ハ金創油ヲ貼ル、次ニ三重ノ木綿ヲ卵白ニ浸シテ創上ニ貼リ其上ニ酢木綿ヲ三重ニ貼リ一大膏デ覆フ、其上ニ枕木綿ヲ置き、巻木綿ニテ束ネ、日々繃帶交換ヲナシ六七日ニテ絲ユルミテ搖グヲ見テ之ヲ剪截スル、其他止血ナドハ、前々ノト同ジ要領デアル。金創治療ノ器械ハ金創針(「反リテ纖月ノ如シ」ト云)剪刀、毛引(鑷子)、彎消息子、「スポイト」、小手鋏、縫合針、糸(麻糸又ハ棉糸ヲ三條ヨリ合セタルモノ)木綿等デ、繃帶ハ今日用ユルモノハ皆既ニアツタ。猶ソノ外ニ關節ノ脱臼ヲ整復シ癰痕ノ彎縮ヲモ治療シタトイフコトデアル。

要スルニ華岡流ハ大體「カスバル」流デアリ、華岡流トシテノ書物ハ多クハ青洲ノ門人ガ書イタモノデアルガ、青洲其人ガ偉人デアツタコトハ疑ヒナイ。瘍科新書、瘍科瑣言、金創要術、金創口授、外科摘要、疔瘡辨名、乳癌辨、膏方便覽等ガアル。門人ノ中デ本間棗軒ノハ青洲ノヨリモ更ニ一步進ンデ居リ「カテーテル」尖首刀(自家考案)、彎曲消息子、探宮子、「ランセツタ」鑷子ナドヲ用ヒ、縫合法ニ「一字、十字、口字、川字、人字等ノ形ヲ適用シタ。

折衷式ノ華岡流ニ對シテ純西洋流トモ云フベキモノハ文政六年(1825)ニ來朝シテカラ出來タノデアル。シーボルトニ就テ學ビタル戸塚靜海、ニーマンニ就テ學ビタル佐藤泰然ナドガソレデアツテ、截除、截斷、血管結紮等ガ行ハルニ至ツタ。

明治維新各地ノ戰ニ從ヒ、既ニ外科醫トシテ多大ノ功ヲ顯シタ英人 Müller-Schultz-Seiba ノ諸氏ノ來朝ト多數先輩諸先生ノ留學トニヨリテ、最近ノ外科學ガ輸入セラレタ。

創傷ノ療法ニ於テハ恰モリストターノ最初ノ實驗ガ發表セラレタノガ明治元年ノ前年デアル點カラ考ヘルト當時ノ歐米ノ療法デモ今日ノモノト餘程距リガアツタ譯デアル。

第二章 リスター以前ニ泰西ニテ行ハレタル創傷療法

古代ニ於テハ西洋デモ油藥、膏藥類ガ主デアツテ、四千年前ノ Papyrus-Ebers ニアル創藥處方ニ人糞ヲ酵母 (Hefe von stissen Bier トアリ) ト共ニ搗リツブシ蜂蜜等ヲ混ジテ貼用スト云フ、即チ汚穢物ヲ塗ルコトガ行ハレタ Dreck-apotheke ノ型ガ出テ居ル。又「リント」様ノモノニ油、脂、蠟ノ類ヲ塗り縋帶材料トシタラシイ。

「ユダヤ」時代ニモサマデ進歩シタモノハナク、妖術、「マジナイ」チドガ可ナリ盛ンデアツタ。然シ其時代ノ字デ「手ハ炎症ヲ醸ス」トイフ句ガ殘ツテ居リ温湯デ創面ヲ洗ツタノモアリ清潔ト創ノ手當トノ關係モ幾分考ヘテ居タモノト見エル。

印度デハ創ヲ縫フタリ壓迫デ止血シタリシテ居タラシイ。此等ガ同ジ程度ノ幼稚ナモノデアルニ對シテ、比較ニナラヌ程進歩シタモノハ希臘ノ醫學デアル。殊ニ Hippocrates ノ教ヘデアル。彼ハ創ノ治癒スル經過ヲ化膿スルモノト、化膿セザルモノト肉芽ノ發生ヲ伴フモノト三ツニワケテ、ソレゾレ其處置ヲ異ニスベシト云ヒ、切創ハ乾燥ニヨツテ治癒セシメ挫傷ノ如キハ濕潤法デ化膿セシメタ。 *subjectiv* ニモ *objectiv* ニモ純潔ニスルコトハ外科醫ノ務デアル。外見風采モ綺麗ニシ辭モ巧ミニ言ヒ、爪ヲ短カクシ、縋帶材料ハ純潔ナルモノヲ用ヒ創ヲ清潔ニシ、例ヘバ頭部ノ手術ニハ必ず剃毛スベシ、又創ニ手ヲ觸ルベカラズ、清潔ニ所置セザル創ハ決シテ治癒セザルモノナリト切言シ、洗滌ニハ必ず *Weyn* ヲ以テシ縋帶ノ前ニハ必ず先ヅ止血セザルベカラズ止血ニハ局所ヲ高位ニシ、海綿、板類等ニテ壓迫スベシト教ヘ、丹毒、壞疽、破傷風、産褥時ノ感染等ヲヨク識別シタ。勿論今カラ見テ幼稚ナ考ヘモアル、即魚類ハ傷ヲ受ケテモ海水中デハ化膿シナイノニ人ノ手ガ之ニ觸レルト必ず化膿スル故、海水ハ創傷治癒ニ効驗アルモノダト云ツテ居ル。茲ニ注意スベキハ大氣ハ瘴 (*Miasma*) ノ媒介者デアリ、*Materia pecans* ハ外氣カラ入ルト教ヘタコトデアツテ此考ヘハ遂ニ二千年後ノリスターノ出ル迄引キツバイテ醫家ノ頭ヲ支配シタモノデアル。

ヒポクラテスノ後五百年 *Cornelius* ノ時ハ血管ヲ結紮シ得ル様ニナリ化膿セザル創ハ *Curo* デ埋マツテ、治癒スルモ

ノデ、肉芽發生ヲ促スモノハ即創藥デアルト考ヘタ。

更ニ百年ノ後 *Chaudius Galens* ノ時ニ至ツテ解剖學モ進歩シ、著膿部ニ排膿管ヲ使用シタリ、結紮ニハ絹糸ヤ腸線様ノモノヲ用ヒ創ノ一次的及ビ二次的治癒トイフ知識モアツタ。

中世ニハ一進一退デ醫學モ暗黒時代デアツタ。前ニハ腸管ノ破レテイル創ハ治癒シ難イト考ヘタモノガ此頃ニ其ノ縫合ヲ試ミ、切斷セル腸管ヲ *Holmdeuter* (*Roger* ヤ *Roland*) ヲ介シテ接合スル様ニナツタリ、*Plazzes* (八五〇—九二二) ニヨツテ「アルコホル」ガ發見セラレタリ、彈丸(一四四四年始メテ使用)ヲ創ヨリ抜キ取ツタリシタカト思ヘバ、一方デハ創刺戟藥トシテ豚ノ糞便ヲ用ヒテヒポクラテスノ「清潔ナル處置」ト云フ聖訓ヲ忘レテ居ル者モ出テキタ。當時面白イ議論ガ盛ニ出タラシク、創ヲ日光ニ曝セバ治癒ヲ促ストイフモノガアレバ、一方デハ外氣ヲ瘴氣ヲ導クモノ故絶對ニ出スベカラズトモ云フシ(勿論後者ニ贊スル者ガ多カツタコトハ前述ノ通りデアル)患者ノ食餌養生ニ慕、煎ジタモノヲ飲ムベシ肉ヲ食フベカラズト主張スルモノアレバ、肉ハ場合ニヨリテ許スベシ水モ飲ムベシ酒モ許スベシトイフ者ナド彼レ是レト飲食物ノ議論バカリニ浮身ヲヤツシタ様デアル。

文藝復興以後。此時代前後カラ戰爭ニ銃砲ガ盛ンニ用ヒラルル様ニナツタノデ軍陣外科ニ影響シタケレドモ進歩ト云フ程ノモノハ止血法ニ就テダケデアル。即 *Ambois Lavé* (阿蘭陀醫學ノ項ニ前述)ガ一五五二年始メテ動脈鉗子(今日ノ *Leau* 氏鉗子ニ近キモノ)ヲ用ヒ出シテカラ急ニ止血法ガ進歩シタワケデアル。

當時解剖學ノ知識ハ可ナリ進ンデ居タニモ拘ラズ、創傷療法ハ依然トシテ「炎症ヲ經テ然ル後ニ」ト云フ考ヘデ行ハレ專ラ化膿セシムルコトニ苦心シ「テレピン」油ヤ「バルサム」ヲ以テ刺戟セネバナラヌモノトシテ居タ。*Paracelsus* 唯一人ガ *sauber und rein zu halten* ヲ第一義トシテ之ニ反對シタニ過ギナイ。然シ彼其人モ一方デハ止血藥トシテ白兔ノ毛ヤ骸骨ノ苦ヲ處方スル程幼稚ナ考ヲ持ツテ居タ。彼ハ彈丸ヤ矢尻ヲ抜クコトハ巧デアツタ。又藥劑ノ効果ニ俟ツヨリモ器械ヲ用ヒテ手ヲ下ス方ガ優ツテイルト考ヘテ居タ。

其内ニ創ヲ縫合スルコトノ可否ガ議論セラル、ニ及ンデ、考ヘガズツト進ンダ。當時縫合ハ盛ニ行ハレ皮膚ニハ一種ノ鉤マデモ使用シテ居タ。Felix Wirtzハ創ハ開放シテ置クベキモノナリトテ、"Practica der Wundarznei"ヲ著シ創ハ底カラ治ルモノデアル、奥デ化膿スレバ分泌液ガ溜リ中カラ破レテクルト云ヒ其所説ハ多數外科醫 (Mon deville, Paracelsus 其他)ノ賛成スル所トナツタ。

伊太利ハ當時黄金時代デアツタ。外科醫モ多數輩出シタ。代表的ノ Fallopioノ教フル所ヲ見ルト創ニ卵白ヲ浸マセタル「リント」ヲ用フル時ハ同時ニ止血ノ効モアル、其上ニ Weinヲ浸マセタル繃帶ヲ當テル。之ヲ毎日交換スル。創ヲ縫合スルトセストハ時ニヨツテ一定セヌ。(頭ノ創ニハ好ンデ縫合スル)深イ創ハ開放シテ分泌物ヲ溜マラセヌ様ニシ排膿管ニハ鉛、青銅銀等ノ製品ヲ用フル。自ラツタノ葉ヲ卷イテ使用スルコトモ考案シタ。西班牙デモ蛋白質ヲ浸マセタ繃帶ヲ用ヒタラシイ。

彈創ニツイテハ Paréノ有名ナル Pyl'es faites par harquebuses (一五四五)ガアル。之モ今マデノ考ヘヲ打チ毀シタモノデ、即チ彈丸ハ熱シテ發射セラルルモノダカラ化膿ノ原因トナルコトハ稀デアルトノ説ヲ劈頭ニ、種々ノ新説ヲ出シ、彈丸ヲ抜ク器械ヲ考案シ、抜ケヌ時ハ刺戟劑ヲ與ヘヨト教ヘテイル。

Boirlisモ彈ノ入ツタ創ヲ指ヲ以テ搔キマワスベカラズ、彈丸ノ爲ニ危険アル時ダケハ抜キ取ルヲ可トス。骨折又ハ大ナル血管傷害ノアル時ダケ肢ノ切斷ヲ行ヘナド可ナリ正シイコトヲ教ヘテイル。然シ猶其時デモ藥劑トシテハ先ヅ豚脂、薔薇油等ヲ貼ツテ、經過ヨケレバ「テレビン」油ヲ混ジタル蜂蜜ヲ貼ツテ見タリ、創ノ周圍ハ墓ノ糞出シタ汁デ濕布シタリシテ居タ。

要スルニ創ハ必ズ化膿スベキモノデアルトノ考ヘハ強ク醫家ノ頭ニ浸ミ込ンデ居タ。Paracelsus, Wirtz等ハ之ヲ恐ルルコト甚シカッタ。此事ハヤガテ創ヲ「清潔ニ取扱」ハザルベカラズトノ注意ヲ強クシタノデ、事實ニ於テ良キ結果ヲモタラシタ。Paréハ Hospitalbrandニ着目シ又轉移性膿瘍ナル事實ヲ發見シ、化膿ハ熱ヲ招來スルコトモ識ツテ居タ。

近世、Harvey ニヨツテ血液循環系統ヲ明カニセラレルニ至リ手術ノ進歩ハ著シク、一方顯微鏡ガ發明セラレテ微生物 (一六七一年 Athanasius Kirchner) ガ腐敗物中ニ動ク微生物ヲ見テ Pathogene vermiculi; cortegium 等ノ考ヘヲ産ンダガ今カラ考ヘルト其微生物ハ血球ヤ膿球デアッタラシイ。一六九五年 Antony van Leeuwenhoek ガ微生物ヲ見タ記載ガ最初セラレテイル) ノ智識ガ啓ケテ來タ。然シ猶瘴氣ノ説ハ強ク浸ミ込ンデ居テ(例ヘバ佛蘭西ノ外科醫 Boissacq ハ「空氣ハ創傷ノ敵ナリ、其冷キコト、其酸トガ血ヲ凝ラシムル害アリ、創面ガ空氣ニ觸ルレバ炎症ヲ起ス云々」ト)。其上創ニ物ガ觸ルルコトガ有害ナリトノ説ガ加ハツタノデ兎ニ角繃帶ハ永續的ニ動カスベカラズ、交換スベカラズ、縛ルベシ、被フベシデ、無闇ニ抑閉主義ヲトツタ。リストターノ石炭酸繃帶モコノ意見ガ支配シテ居ルノデアル。

前述ノ如ク既ニ顯微鏡ガ出來タ位ノ時デアツテ、各方面ノ學術ガ一時ニ進歩シ種々ノ新發見ガ次カラ次ヘト出ヅル内ニ英國デハ Septic, Antiseptic ノ研究學會ガ組織セラレ昇汞、甘汞等ヲ微生物ニ加フル時、或ハ一定度以上ニ加熱スル時ハ之ヲ死滅セシメルトイフ事實ヲ顯微鏡下ニ證明セルニ至ツタ。外科的操作ノ上ニモ可ナリノ進歩ガアツタ。Petit ハ一七三一年血栓ヲ證明シ從ツテ止血ニハ壓迫可ナリヤ結紮可ナリヤノ論議ノ種ヲ蒔イタコトナツタ。兎ニ角止血ガ十分出來ル様ニナツテ肢ノ切斷等ハ意ノ儘ニ行ヒ得タ。繃帶材料ハ殆ド「リント」(Schurpicaup) バカリデ、藥劑ハ漸次簡單ナ處方ノ物ヲ用ヒ始メタ、創面ハ清潔ニセザルベカラズトノ標語ハ盛ンニ用ヒラレタケレドモ細菌ガ異物ニ附着シテ居ルカラデアルトハ決シテ思ハナカッタ。清潔ニスル爲メニハ硝酸銀、昇汞、鉛酸、「ペルーバルサム」樟腦「テレピン」油、紅降汞ナドヲ用ヒ酒精ヤ Wein デ洗ツタガ、是等ガ殺菌制腐ノ効ガアルカラダトハ識ラナカッタ。

當時既ニ今日ノ外科學ニ其名ヲ讃ヘツ、アル Niebold, Heister, Richter, Theden, Hunter, Deschamps, Desault, Scarpa, Petit 等ノ諸大家ガ續々トアラハレタガ創傷ノ療法ハ矢張り瘴氣ヲ恐ルルニ止マツテ、如何ニセバ創ヲ空氣ニ觸レシメズシテ處置シ得ルカニ就テノミ努力シタ。殊ニ當時旺盛ニ流行シタ Hospital brand ガ最大ノ強敵トシテ上記ノ努力ニ挑戦シテ居タノデアル。(未完)